

日本山岳会百年史より抜粋

榎 有恒（まきゆうこう）

榎有恒（1894～1989）仙台市に生まれる。幼少時代を神戸、京都で過ごした後、小学校4年より仙台に移り、仙台二中（旧制、現仙台第二高等学校）に進む。1913年慶応義塾予科に入学。翌年中村清太郎・高野鷹蔵の紹介で日本山岳会に入会。会員番号341。この年上高地から前穂高、針ノ木越えで立山、剣に登る。1915年慶応義塾内に山岳会を設立し幹事に。1917年慶応義塾を卒業し、翌年コロンビア大学に留学。1919年渡欧、ロンドンでウェストンの知遇を受ける。1920年ヴェッターホルン、メンヒ〜アイガーを縦走、フィンスターアールホルンに登る。**1921年アイガー東山稜を初登**。アルプスの登山技術を携えて帰国し、日本の登山界に大きな刺激と影響を与えた。1923年吹雪の立山・松尾峠で遭難、同行の板倉勝宣が死亡。**1925年カナディアンロッキーのアルバータに初登頂**。

1923年に刊行された「山行」は、アルプスでの登山とともに、「板倉勝宣君の死」として立山での遭難時の状況を食料や着衣にいたるまで克明に記し、その後の冬山登山に多くの教訓を提供した。

日本山岳会では1923年初めて幹事になり、外交を担当した。今日の海外連絡であろう。1930年から理事、1941年副会長、1944年木暮会長の後任として会長になり1946年まで在任。1951年から1955年まで会長。この間、1947年信濃支部初代支部長。1950年名誉会員に推挙された。**1956年には第三次マナスル登山隊の隊長として初登頂に導いた**。1957年アルパインクラブ百年祭に出席、1970年同会名誉会員に。1967年日本山岳協会会長。1989年死去、日本山岳会葬が営まれた。

「山登りに徹した人は、おしなべて自己顕示欲などというもののからほど遠いのだが、榎さんもまさにそういう生き方をされた方だと信じて疑わない」「日本に真の意味の西欧流の登山の種を蒔き（スイス・アルプス）、それを育てて開花させ（アルバータ）、最後にその果実までを自らの手で摘みとった（マナスル）文字通り稀有の人であった」（望月達夫）。

著書は他に『マナスル登頂記』『わたしの山旅』などがある。

著書「わたしの山旅」I 思い出の日々 泉ヶ岳のこと 抜粋

泉ヶ岳のこと

仙台での山歩きの思い出に残る一つは泉ヶ岳登山であった。この山は仙台の西北方にそびえ市内のどこからでも見える。奥羽山脈、船形山から東南に派生した山脈の一番はじに立って仙台平野を見下ろしている。標高1200メートル足らずの山ではあるが、おおらかな裾を引いて立つ姿は清新で第二中学校の校歌にも歌われている。今日では、仙台のレクリエーションの山となって青少年の登山やスキーで賑わっているが、その頃は登る人もなく、また登ってみて路さえなかった。**私たちの登ったのが初夏であったと思うのは残雪を見たからである**。山裾の村に一泊して、教えられた谷間の草むらや林の中を分けて登った。だが頂上の記憶がない。わらじばきの強行であったことだけを覚えている。目的を達して探検気分を味わったのであった。